



## 竹取物語とローマの休日

池澤夏樹さんという作家が、個人編集の日本文学全集全30巻を河出書房新社から出していて、図書室でも購入してもらっているのだが、この全集の特長は、古典の作品も（現代語訳で）多く取り入れている点である。

さて、この全集にも『竹取物語』が入っているのだが、その現代語訳を担当しているのは、『夜は短し歩けよ乙女』や『有頂天家族』などで有名な作家、森見登美彦さんである。その森見さんが、インタビューに答えて次のように述べている。

\*

大学に入って、文化人類学演習という授業がありまして、僕は実家の傍にある、茶筌をつくっている里にお邪魔しました。茶筌師さんたちに「いい竹って何ですか」とわざわざ話を訊きに行って、レポートをまとめたんです。それから大学院に進んで研究室に入ったんですけど、そこでも竹です。竹の中で働いている酵素を調べたりしました。そこで竹を何本か分解させていただいたりしましたが、でもこれが、おもしろくなくてですね。僕の好きなのは竹林であって、竹の分析が好きなわけじゃないと気づきました。（中略）

訳してみて、『竹取物語』には本当に僕の好きなものが出てくると思いました。ユーモアと悲恋ですね。五人の求婚者も失恋するし、帝も失恋する。わけへだてなく、皆が非恋に終わります。

映画の『ローマの休日』そっくりだと思ったりもしました。うちの父親が好きで、家をよく見てたんです。オードリー・ヘップバーン扮するお姫様が身分を偽って街に出て、グレゴリー・ペックと恋に落ちる。でも二人は

別れてしまう。ヘップバーンは最後にペックと抱き合っ、て、宮殿へと帰って行きますよね。その場面がくると父親が必ず「悲恋やナア」と言っていたんです。何回も見てるくせに、必ず「悲恋やナア」って言うんですよ。

宮殿に帰ったヘップバーンは、急に背筋をびんと伸ばして、お姫様に戻るんです。周りの人たちが子ども扱いすると、ぴしゃりと大人のふるまいで返したりする。そのへんも、かぐや姫に似てますよね。そんな昔のことを思い出しながら訳しました。

『竹取物語』はまるで僕が書いたような物語でした。

（『作家と楽しむ古典』河出書房新社、2017）

\*

ここに登場する名画『ローマの休日』は、名前くらいは知っていると思うが、とても素敵な映画なので、ぜひ見ることを勧めたい。物語の背景となっているローマの街も素敵だし、ここでも触れられている最後の場面は、恋の切なさがヒシヒシと伝わってきて感動的である。若き日のヘップバーン（とペック？）の魅力も満載で、まさに「THE 映画」という作品である。

ついでに、池澤さんの文学全集もお勧めしておきたい。例えば、『宇治拾遺物語』を担当しているのは、パンク歌手であり作家でもある町田康さん。この訳はもう最高である。説話だから下世話な話（いわゆる下ネタ）も多いのだが、だからこそ町田さん本領発揮で大いに笑える。そして、原文ではどうなっているのだろうと気になるのだが、原文よりもはるかに訳の方が「パンク」である。